

小学館の学年誌と児童書
目次

第 I 部

- 1 前口上 2
 2 東京生まれで長野へと疎開
 3 父親の復員と飯山での生活 6 4
 4 初めて買った雑誌が『小学一年生』 7
 5 子ども雑誌の付録 10
 6 児童文学とカバヤ文庫 12
 7 カバの宣伝カーの記憶 16
 8 戦後の子どもの遊び 19
 9 石投げ、印地打、駆逐水雷 22
 10 農繁休暇と採集遊び 24
 11 フラフープ、週刊誌、ダッコちゃん 28
 12 高度成長期を迎えて 32

第 II 部

- 13 飯山の書店と古本屋 36
 14 歴史とメディアに目覚める 38
 15 学研と旺文社 41
 16 『平凡』と『明星』 43
 17 児童書出版の隆盛 44
 18 児童文学体験はほとんど無かった 46
 19 大学時代と長野県人寮 49
 20 出版社も権力に対峙していた 51
 21 マスコミの就職事情 54
 22 小学館入社 58
 23 一九六七年の小学館状況 60

第 III 部

- 23 小学館入社 58
 一九六七年の小学館状況 60

目次

24	白土三平『忍者武芸帳』	62
25	手塚治虫『エンゼルの丘』	65
26	『小学一年生』編集部配属と書店研修	67
27	手塚治虫の担当となる	70
28	兼六館労働争議	74
29	ウルトラ怪獣との出会い	77
30	怪獣大図解とスベル星人問題	79
31	絵本、『ウルトラ怪獣入門』、『怪獣図解入門』	81
32	小学館の学年誌状況	83
33	出版業界の成長と原稿料	88
34	学年誌の発行部数	91
35	永井豪「なぞなぞぼうやXくん」	95
36	松谷みよ子と童話連載	97
37	辺見じゅん、角川春樹、『日本の民話』	101
38	『野生時代』創刊エピソード	104
39	角川春樹と飛鳥新社	107
40	『小学一年生』の編集長になる	112
41	『国際版少年少女世界童話全集』のことなど	116
42	コミックスの刊行	120
43	多くの肩書のある名刺	123
44	『21世紀こども百科』の企画	130
45	『こども百科』のシリーズ化	132
46	児童書から一般書へ	132
47	『新編日本古典文学全集』	135

第V部

第IV部

	48	鷲尾賢也と松本昌次『わたしの戦後出版史』	138
	49	網野善彦『蒙古襲来』 ¹⁴⁰	
	50	文芸編集部の上り上げ、松岡圭祐、嶽本野ばら	142
	51	片山恭一『世界の中心で、愛をさけぶ』	145
	52	翻訳絵本と児童書専門店	148
	53	小学館クリエイティブ設立と『正チャンの冒険』復刻	151
	54	『影』と『街』の復刻	153
	55	『火星探険』『汽車旅行』を始めつぎつぎと復刻	155
	第VI部		
	56	児童文学者、研究者としての野上暁	160
	57	子ども調査研究所、斎藤次郎、山中恒	162
	58	一九七九年『おもちゃと遊び』の刊行	165
	59	戦後児童文学史再考	168
	60	児童文学者の戦争責任問題	170
	61	中村書店の漫画	172
	62	戦後の児童書と児童雑誌の出版	174
	63	『赤い鳥』と鈴木三重吉代作問題	177
	64	『少年文学の旗の下に』とその反響	179
	65	現代児童文学の誕生	182
	66	六〇年代以後の新しい作家の出現と創作児童文学の出版点数の増加	183
	67	児童書と電子書籍問題	186
	68	越境する児童文学への注視	188
資料		現代子どもの文化史年表（野上暁『おもちゃと遊び』所収）	192
		小学校と図書室（小田光雄『図書館道遥』所収）	201
		あとがき	205

第
I
部

1 前口上

——今日は児童文学者、評論家の野上暁さんにお越し頂きました。よろしく願います。

野上 いやいや、こちらこそ。

——野上さん自らの紹介というのは照れくさいでしょうから、私が代わりに務めます。

野上さんは『おもちゃと遊び』（現代書館）、『子ども』というリアル』『日本児童文学の現代へ』（いずれもバロル舎）、『子ども学 その源流へ』（大月書店）、『越境する児童文学』（長崎出版）などの子どもと児童文学に関する評論集、実際の創作として絵本『あいうえおばけのおまつりだ』（絵・美濃瓢吾、長崎出版）、『考える絵本 子ども・大人』（大月書店）や『ぼくらのジャングルクルーズ』（理論社）といった共作絵本や児童文学も著わしているので、よくご存じの読者も多いと思います。

またその一方で、昨年亡くなった元講談社の鷲尾賢也さん、岩波ブックセンターの柴田



信さんたちが立ち上げた「本の街・神保町を元気にする会」の小冊子『神保町が好きだ!』の編集者でもあります。

それから以前は本名のほうの上野明雄として小学館に勤務し、『小学一年生』などの学年誌、児童書、学術・文芸書の編集にも携わっておられました。そして、『21世紀こども百科』『日本20世紀館』などの事典類の企画・編集にもかかわっておられる。まだまだ付け加えたいことはいくつもあるのですが、それらはインタビューの過程で取り上げることにします。

野上さん、こんな紹介でかまいませんか。

野上 それで十分ですよ。何となく気恥ずかしいし。

2 東京生まれで長野へと疎開

—— それではこのような野上暁Ⅱ上野明雄さんの紹介をイントロダクションにして始めさせて頂きます。

これは「出版人に聞く」シリーズ16、17の井家上隆幸さんや植田康夫さんの話をうかがっていて、あらためて確認したわけなんです。戦前から高度成長期以前に生まれた世代は現在とまったく社会環境がちがっている。それに地方と都市の較差というものもものすごくあった。

野上 それは本当にちがいますよね。僕が生まれたのは一九四三年八月三十一日です。—— という昭和十八年の戦時下ですね。

野上 生まれたのは東京の順天堂病院、家は蔵前の国技館の近くだったようです。ところが生まれて三ヵ月後に親父が出征するはめになった。丙種合格で、しかも近眼がひどく、剣道で指を痛めていて指が動かないこともあって、鉄砲が撃てないから、戦争にいかないでいいとっていったようなんですが。

——この年に第一回学徒出陣が始まり、徴兵年齢も十九歳まで引き下げられていますので、これまで徴兵除外されていた人たちも出征の対象になったという事情が反映している。

野上 そういうことでしょうね。それで十八年の十二月に出征し、金沢の第六連隊に入隊した。家族のほうは国内だから早く帰ってくるだろうと思っていたし、親父も風呂敷一つぐらいの荷物でいったわけです。でもずっと帰ってこなくて、復員してきたのは二十一年の冬で、二月ぐらいじゃなかったかな。

だから生まれて間もなくから父親はいないも同然で、三歳ぐらいになったところいきなり現われたことになる。十九年に長野の祖母の実家に疎開し、おふくろと祖母、ひいおばあちゃんという女所帯の中で育っていたから、そこに男一人が帰ってきたことは何となく違和感があり、親父というのはこわいだけで、ずっと親しめなかったという事情も生じました。

3 父親の復員と飯山での生活

—— 母親の手で育てられた小学生の男の子が父親の復員によつてのけ者にされたような気持ちに追いやられる『黄色いからす』という映画がありましたね。あれは原作が集英社から出ていたはずです。ちょっと著者は思い出せないけれど。

野上 映画監督は五所平之助で、戦後の復員と家族問題を扱った秀作でした。この映画と同様に、僕のところでも妹が生まれました。

その頃は田舎でも食べるものもないし、お金もないから大変だった。妹が生まれた時におふくろのおっぱいが出なかつたので、おばあちゃんと一緒にヤギの乳をもらいにいったこともある。

—— 疎開してからずっと長野暮らしだったんですか。

野上 そうです。それでも家族が増えたこともあり、一九四八年に疎開先の家から引越している。引越しにあたっては家を買ったわけだけど、その家が引越してから一週間後に全焼してしまった。それは背中合わせになっている家から火が出たためで、こちらも焼け出

され、ずっと苦労して家を買ったのに、また仮住まいしなきゃいけないという感じだった。親父はパン屋というか、自転車で隣の町のパン屋からパンを仕入れてきて売っていた。僕が小学一年生の夏に呉服屋の土蔵を借り、そこを改良し、菓子パンなども置く菓子屋を始めた。戦後の庶民の特有の小商いというところですね。だから貧しくて本を買ってもらったことはなかった。

4 初めて買った雑誌が『小学一年生』

—— 雑誌も含めてですか。

野上 そうとばかり思いこんでいたのですが、かなり前に小学一年生の時の絵日記が出てきた。それを見たら、正月にお年玉をもらったので、『小学一年生』を買い、その表紙を描いていた。それで思い出した。周りの子どもたちはいつも買ってもらっていたのに、僕は初めて買ったものだからわからなくて、本来ならば二月号が出ているはずなのに、一月一日に開いている本屋で買ったこともあり、一月号を買ってしまったということなんでしょう。生まれて初めて買った雑誌の編集者に自分になるなんて考えもしなかった。

—— そういうことっていつまでも覚えているものですよね。

野上 でもそれは買ってもらったというよりも、自分がお年玉で買ったもので、やはり雑誌も買ってもらえなかった。ただその代わりに借りられる環境にあった。

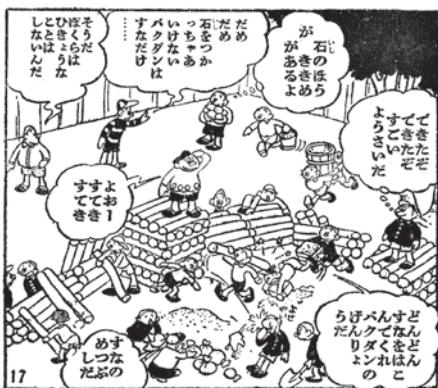
親父が菓子屋を始めた場所は昔の芸者街というか色町で、ちよつと先に見番の跡があったりした。それで芸者さんの子どもとか、料亭に勤めている母一人子一人みたいな子どもたちが多くいた。そういう親たちは僕たちよりも金回りがよかったです、子どもたちに雑誌を買い与えていた。だからその連中から借りて読んだ。

—— それはどんな雑誌だったんですか。

野上 『冒険王』とか『おもしろブック』とか、当時の少年誌は全部揃うほどだった。これは定かに覚えていないけれど、たぶんメンコを三枚やるから貸してくれとかいって、色々と交換条件を出すことで貸してもらったはずですよ。

—— それらの中で印象に残っているものはありますか。

野上 それは馬場のほろの『ポストくん』という漫画ですね。その頃ちようドラジオでロビン・フッドをやっていた。『ポストくん』の中でもロビン・フッドもどきに空き地の広場のところをシャーウッドの森として、自分たちの陣地と旗を作り、黒パン党という隣



馬場のぼる「ポストくん」
〔『少年漫画劇場』11、筑摩書房〕

町の連中と合戦する。遊びなのか喧嘩なのかわからないけれど、とても面白かった。この頃のことは近著の『子ども文化の現代史』（大月書店）でくわしく紹介していますが、あれは昭和二十六、七年だったんじゃないかな。

—— その『ポストくん』を読みたいと思ひ、『馬場のぼる集』（第二期現代漫画）4、筑摩書房）を入手したのですが、残念ながら収録されていませんでした。でも馬場の略歴紹介のところ、「小学館の学習雑誌に児童漫画を描き始める。『ポストくん』『山から来た河童』等の傑作で人気を博す」とあり、野上さんと小学館の縁がここにもあったのだと思いました。

私にしても少年時代に「出版人に聞く」シリーズ14の原田裕さんが企画編集した『江戸川乱歩集』、同じく17の植田康夫さんの処女作『現代マスコミスター』などを読んでいまして、まさかこのようにインタビューすることになるとは考えてもいませんでした。



前川かずお氏と「漫画家集英社」忘年会で

5 子ども雑誌の付録

野上 でも読書の記憶というのは巡り巡ってどこかであつたりする。それが面白いところで、僕も『ポストくん』が連載されていたのが小学館の兄弟会社の集英社から出版されていた『おもしろブック』だと知ったのはずっと後のことでした。つながりといえば、新入社員の頃からお世話になった、イラストレーターで後に昆虫カメラマンになった奥山ひさしさんと、やはり親しくおつきあっていたマンガ家の前川かずおさんが、二人とも馬場先生のお弟子さんだったというのも奇遇です。そのつながりで馬場先生のお宅にうかがったり、仕事もお願いしました。

—— 『ポストくん』の他にも記憶に残っているものはありますか。

野上 子ども雑誌に関していうと、昭和三十年前後、一九五五、六年が月刊誌の黄金時



学習スライド映写機
「少年」28年11月号
中に電球を入れ、川上選手などが映っている付属のフィルムを筒と箱の間に入れて映写する。この様な仕組みのふろくが流行した。
©光文社「少年」

『別冊太陽 おまけとふろく大図鑑』平凡社より

代だったと思う。その頃の『少年』の組み立て付録はすごく人気があった。僕は例によって買ってもらえなかったけれど、今でも覚えているのは付録のレコードが本当に音が出るというもので、そこに針を落とすとかすかに音が出てくる。昔のコロンビアの犬が聴いているみたいな感じのラップが付いていて、手回しでやると、メロディが流れてくる。細部の記憶はあやふやですが、これがまさに組み立て付録だった。

—— 少年雑誌の付録というのは戦前の『少年倶楽部』などからの蓄積がものすごくあり、それが戦後になっても保たれていたということなんですね。

平凡社のムック『おまけとふろく大図鑑』（別冊太陽）を見てみますと、そのレコードの組み立て付録はないけれど、ちょうど五〇年代の『少年』の付録で、天体地上望遠鏡、学習スライド映写機、天然立体テレビジョン映画などが掲載されています。

野上 そうそう、そのほかでは、幻燈機も大人気

でした。

—— 私などの世代で覚えているのは日光写真真機ですね。でも六〇年代に入ると、別冊漫画が増えていって、組み立て付録の影が薄くなっていったような気がします。

野上 今になってみればよくわかるけれど、配送の問題もあって、別冊漫画のほうが付録として楽だったからでしょう。

—— まさにそうですね。読者はともかく、出版社、取次、書店にとって組み立て付録は生産や流通も気を遣うし、とりわけ書店の場合は現場で付録を本誌にはさむ手間がかかるので、別冊漫画のほうが歓迎される。それで六〇年代になって組み立て付録もすたれていったと考えられます。

ところで本のほうはどうだったんでしょうか。

6 児童文学とカバヤ文庫

野上 本はまったく買ってもらえなかったから、ほとんど読んでいないけれども、記憶している中で最も古いのは『ノンちゃん雲に乗る』で、これはおふくろが読んでくれた。

ただ学校に上がる前だったこともあり、さっぱりわからなかった。

—— それはおそらく最初の大地書房版ですね。

野上 そうだと思います。それから他にも壺井栄の『母のない子と子のない母と』や坪田譲治の『善太と三平』なんかも読んでもらったけれど、これらもよくわからなかった。おふくろがこれらの児童文学を読んでくれたのはおそらくそういう時代の風潮があったんじゃないかな。それでもかろうじて覚えているのは『善太と三平』で、善太か三平が橋の欄干のところを歩いていって落ちそうになるところです。その後読んでいないのだが、その場面が印象に残っている。

小学一年生になって初めて買ってもらったのは浜田広介の『ひらがな童話集』という厚い本で、出版社はどこだったかな、ちよつと思いつい出せない。後はほとんど買って買っていない。

—— 絵本なんかはどうだったんでしょうか。

野上 まだ幼稚園の頃でしたけど、田舎でも戦前の講談社の絵本がかなり揃っている家があつて、結構読みましたよ。木口小平は死んでもラッパを離しませんでしたといった内容でしたが、そういえば、『乃木大将』なんていう絵本もあった。



その他の読書体験というのはカバヤ文庫に
尽きますね。

—— 俳人の坪内稔典に『おまけの名作
カバヤ文庫物語』（いんてる社）があります
が、どんな感じの本なのか。実物は見て
おりませんので。

野上 カバヤ文庫でまず思い出されるの
は紅梅キャラメルのことです。このあたり
も、『子ども文化の現代史』（大月書店）にく
わしく書きましたが、うちが菓子屋を始めた
頃に、この紅梅キャラメルが流行っていた。
このキャラメルを買うと、一箱に一枚野球
カードが入っていて、例えば十枚揃えて巨人
軍チームを作ったりする。そうすると賞品を
もらえる。それは巨人軍監督だった水原茂編

『少年野球手帖』を始めとして様々にあり、バットやグローブも賞品に挙げられていた。ただ紅梅キャラメルは途中でつぶれてしまったので、集めたけれども、もらえなかったという子どももいた。そんなこともあってか、僕の場合は紅梅キャラメルで賞品をもらったという記憶はまったくくない。

—— 紅梅キャラメルのことは先の『おまけとふろく大図鑑』にも出てきます。それに続いてカバヤ文庫とその目録も掲載されていて、両者が文字通り戦後の「おまけ」のスター的存在だったとわかる。

野上 カバヤ文庫もカバヤキャラメルに入っていた文庫券を集めると、近所の菓子屋でも交換できたこともあって、うちの菓子屋にも置かれていた。でも店の商品だったから、これには手をつけられなかった。

カバヤ文庫というのは一九五二年から五四年にかけて、全部で一五九冊、二五〇〇万部が刊行されたといわれ、B6判ハードカバー、一二五ページの世界名作のダイジェスト版なんです。一〇円のカバヤキャラメルの箱の中に色々な文庫券が入っていて、基本的には五〇点で本一冊をもらえるわけですが、五〇点のラッキーカードがあったり、「カ・バ・ヤ・文・庫」の五文字のカードを揃えたりすると一冊がもらえたりもして、色々と今でい

うオプシオンがついていた。

—— ということはそれこそラッキーならば、一〇円か五〇円で一冊が手に入ったことになるわけですね。

野上 そういうことです。当時の児童書は百円前後していましたから、それもととも魅力だった。

それにカバの格好をした宣伝カーが全国を回っていて、長野にもきた。

7 カバの宣伝カーの記憶

—— 長野の写真家熊谷元一がそのカバ自動車の写真を撮っていて、それが『おまけとふろく大図鑑』にも掲載され、五三年となっています。

野上 だったら実際に僕が見たのもそれだったかもしれない。それが田舎にくるとわかって昂奮したことを覚えている。当時の田舎道は車なんてほとんど通らないし、舗装もされていないから、カバの宣伝カーが砂煙を上げて走ってきた。カバヤの歌を流しながら、後ろからカバヤのカードをばらまくわけです。僕たちはそれを拾って集め、その後か



カバヤの宣伝カー（『別冊太陽 おまけとふろく大図鑑』平凡社より）

らついでいくと、公民館でカバヤの子ども祭みたいなのが開かれた。その頃は「三つの歌」が流行っていたので、アコーディオンに合わせて「三つの歌」を歌うと、カバヤ文庫を一冊くれるというんです。五十畳敷ぐらいの広い公民館にびっしり子どもが集まっていて、誰もがほしいので、はいはいと手を挙げるのだけど、なかなか当ててもらえない。それでまだ学校に上がっていない弟が一緒にいたので、彼を抱き上げて当ててもらった。ところが段上と呼ばれたまではよかったが、上がってしまい、声が裏返って歌えなかった。それでもとにかく一冊はもらいましたけどね。

—— 戦後の高度成長期以前の田舎の光

景が目には浮かぶようです。外から何かがやってくること自体が一種の祭のようだった時代が確かにありましたものね。

それから私はカバヤ文庫体験がまったくないので、坪内の『おまけの名作』や先の『おまけとふろく大図鑑』の「カバヤ文庫」目録で知ったのですが、序文を書いている人たちが錚々たるメンバーであることにも驚かされました。

野上 僕は古本屋で買った十数冊しか手元にはないけれど、すべてに序文が入っていて、桑原武夫、生島遼一、伊吹武彦、貝塚茂樹、吉川幸次郎、大山定一、今西錦司などが書いている。これはカバヤが岡山にあったこと、カバヤ文庫の企画編集者の原敏が同志社大学出身だったことが関係し、京大の教授から助手や大学院生まで総動員されたんじゃないかと推測しています。

—— 彼らの他に岡正雄、石田英一郎などの文化人類学関係者や吉田健一、中野好夫の名前も混じっていたりして、京都だけにとどまらず、東京の人脈にも及んでいる。それにリライトしたメンバーの中には五味康祐などもいたようで、本当に多彩な人たちが集まり、それがカバヤ文庫の魅力を引き立てるファクターだったんでしょうね。

野上 それは間違いないね。作者名も訳者名もまったく入っていないけれど、おまけの

児童書とは思えないほどの立派な文章だし、今読んでもちよっとびっくりするくらいです。まさに坪内さんの『おまけの名作』というタイトルがびったり合ってしまう。いいタイトルをつけたものだと感じします。

8 戦後の子どもの遊び

—— 私も同感です。

さてここまでは野上さんの子ども時代の雑誌や本、読書にまつわる話をうかがってきたわけですが、次にこれも野上さんの処女作『おもちゃと遊び』にちなんで、戦後の子ども遊びについてお聞きしたいと思います。これは私なども同様ですが、テレビの出現以前の田舎の遊びというものは採集遊びが基本だった。何かをとりにいく、それは魚、鳥、甲虫といった生物だったり、木の実やミカンなどだったりした。おそらく古代の頃から子どもはそのように暮らしてきたんじゃないかと思うし、自然を相手にする、資本主義化していない子どもの遊びを体験してきた。

それが高度成長期を経るにしたがって変わってくる。野上さんが『おもちゃと遊び』の